第２部　日本における綿栽培の盛衰と加古川西部地域における綿栽培の歴史が有する意味

矢嶋　巌

Ⅰ　はじめに

日本における衣料原料の歴史について明らかにした永原（2004）によれば、それまでの繊維素材と比べて、さまざまな点において能力が高かった綿は、16 世紀の戦国時代織豊期のうちに、東北地方を除く各地で生産されるようになった。江戸時代になると、寛永年間（1624-29）に大坂に綿市場が開設され、畿内やその周辺地域、とくに摂津、河内、和泉、大和において、綿の栽培から織布までが、村々で営まれるようになっていたとされる。

近世の播磨地方は、和泉、河内、摂津等と並んで、全国有数の綿作地帯の一つであった。宮崎安貞の『農業全書』（1697 年）にも、綿作地域として播磨の名が挙がっている（加古川市史専門編さん委員編 1994、pp.436-439）。

1762（宝暦 12）年刊行の『播磨鏡』によれば、印南郡および加古郡は、播磨国における木綿の名産地とされ、加古川市域はかつて綿作の中心地であったと考えられている（加古川市史専門編さん委員編 1994、pp.436-437）。加古川地方における綿栽培は主に畑作として営まれ、主要綿作地帯と同様に江戸時代から明治時代初期まで隆盛を見せたものの、その後急速に衰退し、販売生産としては、明治時代末までにほぼ姿を消した。旧印南郡の加古川市東神吉地

図１　明治中期における加古郡・印南郡および西神吉村・東神吉村の位置

注　二点鎖線は郡界を、一点鎖線は町村界を示す。

資料　加古川市史編さん専門委員編（2000）付図

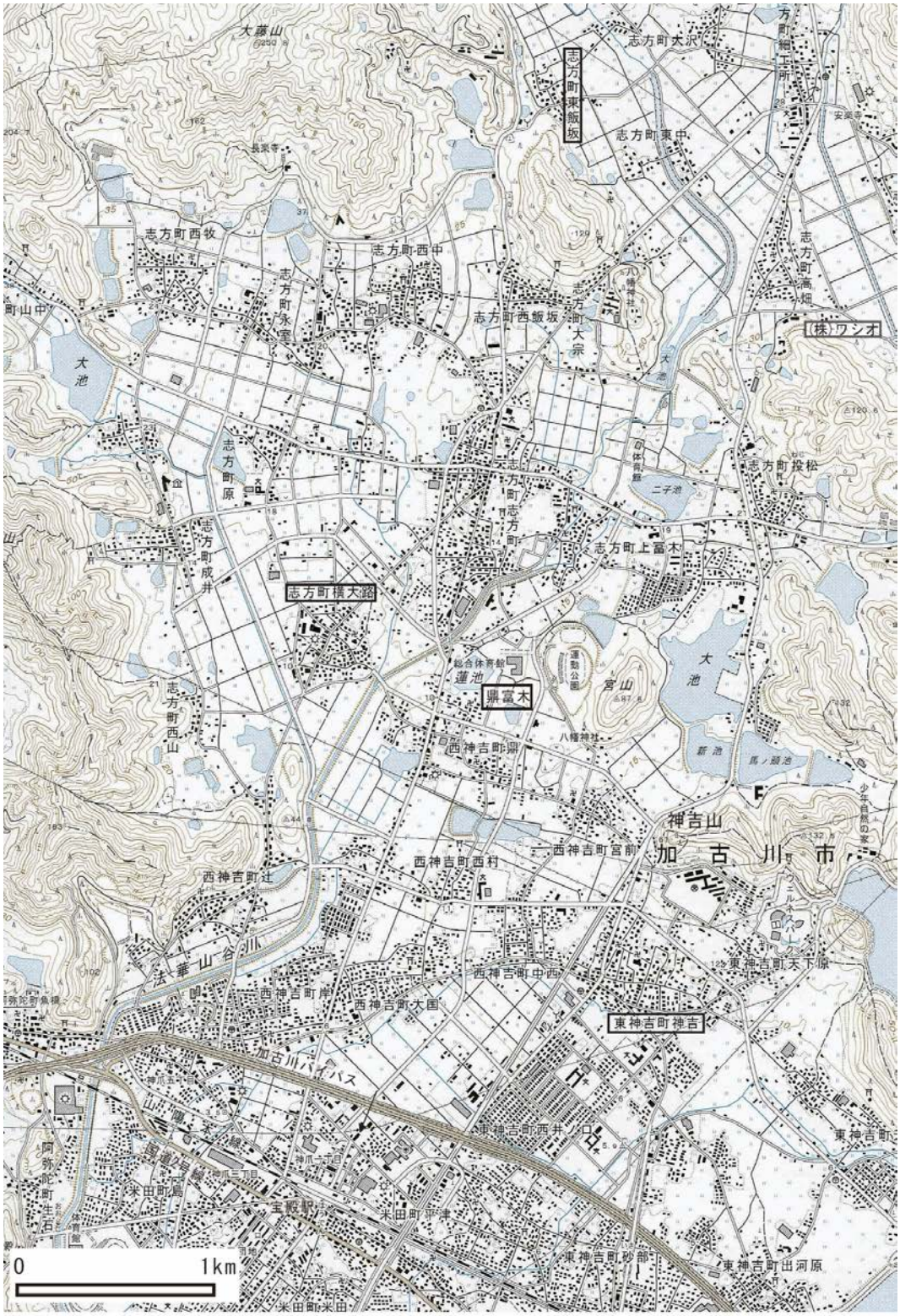

図2 研究対象地域の兵庫県加古川西部の概観
国土地理院2万5千分の1地形図「加古川」（2005年更新）に加筆

区、西神吉地区（図 1・2）では、現在販売農家の作付面積において稲が 9 割を超えている（表 1）。畑での綿作が盛んであった江戸時代とは、景観を大きく異にしているはずである。

表1　過去1年間に販売目的で作付け（栽培）した作物および果樹の面積の割合（%）

	加古川市	東神吉地区	西神吉地区
稲	88.6	91.0	94.2
麦類	2.6	−	2.1
野菜類	5.6	4.6	3.1
花卉類・花木	0.4	2.9	0.3
果樹	0.8	−	0.1
作付・栽培面積(a)	66,681	2,608	3,642

注　加古川市統計書掲載の2010年世界農林業センサスによる。

一方、現在の加古川市では、旧印南郡の志方町において、かつての綿栽培に脈絡を有するメリヤス製品である靴下生産が地場産業として続けられているほか、日本有数の生産量をあげていたタオル産業が 2000 年代まで立地し、その記憶は今なお住民の心に刻まれている。また、綿栽培で大量に使用されていた干鰯取引に由縁を持つ化学肥料メーカーも立地している。綿花栽培の歴史は、一部の地域住民や事業者によって再発見され、近年の加古川市や周辺では、かつての綿栽培地域の記憶を残すかのように、加古川市志方町を中心とする肌着メーカーによる地元原料による靴下生産を目指す加古川コットンプロジェクトや、現在の高砂市出身の近世の技術者工楽松右衛門による木綿帆布の改良に因む、松右衛門帆製品のブランド化などが進められている（朝日新聞朝刊播磨版 2011 年 7 月 27 日記事、朝日新聞朝刊播磨版 2013 年 4 月 6 日記事）。矢嶋・矢嶋ゼミ 2015 年度履修生 2016）。また、姫路市では、藍染め品メーカーによる、地元の大学などとも連携した綿栽培と木綿生産のプロジェクトが行なわれており、2016 年 12 月 17 日サンテレビ放送の「姫路のひろば」で、山間地域における休耕田対策として期待されている様子が放送された。

神戸学院大学地域研究センター明石グループ都市郊外班は、加古川西部地域を対象地域の一つとし、都市近郊農村の価値を再発見するべく、2011 年度より大学と地域との協働による研究を続けている。2015 年度の研究では、上述の加古川コットンプロジェクトにおいては、靴下産業の再興を目標に、地域の営農組合や地元の小学校と連携しながら、地元の肌着メーカーであるワシオ(株)が中心となって取り組みを進めている状況を知った。地域においてその価値の再発見を目的として研究を続けていくためには、対象地域の現在に至るまでの景観変遷、つまり地域形成過程の把握は欠かせない。本研究対象地域においては、かつて隆盛した綿栽培の歴史と残存する脈絡についての理解は重要である。

本稿では、綿作に関する諸研究や加古川市史などに基づいて、日本における綿栽培の広がりについて概観した上で、加古川市におけるかつての綿栽培の歴史を振り返り、その展開と現在への脈絡を明らかにする。これにより、加古川地域における綿栽培の歴史が有する意味と現在につながる脈絡について考え、綿栽培の歴史が現代において有する意義について検討する。

Ⅱ　日本における綿栽培の広がりと衰退

綿は、熱帯・亜熱帯原産のアオイ科多年草で、栽培には日当たりと水はけ、栄養分を必要とする。原産地に比べて冷涼な日本では、単年栽培となる（武部 1989、p.60；大野・広田編 1986、p.10）。日本において、綿は貴重品で、中世までは中国や朝鮮からもたらされる綿が、珍重されていた（永原 2004、pp.220-221）。

永原は、日本各地における綿作の開始時期に関する史料を整理し、15 世紀末～16 世紀初頭にかけて、寒冷な東北地方などを除いて、ほとんど全国的に綿作と綿業が広がったとしている（2004、pp.323-324）。

木綿は、それまで衣服として用いられていた苧や麻と比べて丈夫であり、暖かい素材であったため、兵衣として用いられた。また、火縄銃の木綿火縄に使われるなど、軍事的需要から利用が広がった（永原 2004、pp.264-272）。

江戸時代前期には、畿内と東海の綿業地帯の骨格が形成され、商品化のための流通組織も整備されつつあった。1628（寛永 5）年の「百姓着物之事」という幕府の定書に、一般百姓の着物は麻・木綿と定められていることから、すでに木綿が庶民の日常的な衣料として入手しやすい存在となっていた（永原 2004、pp.301-304）。

農家にとって、綿作が全国拡大する以前の 17 世紀末までは、綿は高い反収で栽培地域の農家経済を潤し、有利な作物となっていた。このことも、綿が各地に栽培が拡大する要因となったと考えられている（岡 1977、p.416）。

綿の普及は江戸時代の経済を変えたとされる。まず、その丈夫さゆえに、17 世紀後半から 18 世紀にかけて、綿は帆布として用いられるようになった。構造船が建造されるようになったこともあいまって、大型の帆船が発達した。それまでの菰や筵の藁による帆の船に比べて、横風や逆風に強く、水夫の数も少なくて済み、航海の所要日数を短縮させた。遠距離航海が可能となったことで、廻船業が発達した。綿糸は地引き網や船曳網に使用されるようになり、鰯の漁獲量を増加させた。綿の栽培には多くの肥料を要することから、大量の鰯が干鰯として農村に流通するようになり、綿の生産性をさらに高めることにもつながった。また、阿波では、すでに染料として栽培されていた藍の生産が飛躍的に増大した（岡 1977、pp.416-417；永原 2004、pp.273-277、pp.332-337）。

一方、永原（2004、pp.324-325）によれば、江戸時代前期の 17 世紀になると、三河・尾張・伊勢を除く東海と関東における綿の商品栽培が全国的な比重を低下させた。代わって、畿内とその周辺地域において綿作と綿織の主産地が集中するようになった。また、木綿作＝実綿→繰綿→綛糸→織布という綿業の工程の分化が、とくに摂津・河内・和泉で、遅くとも寛永頃（1620-29 年）までに成立していたとし、そのことが綿作の集中を可能とし、木綿作の高度化にもつながった。永原は、岡（1977）が作成した 1763（天文元）年の大坂への木綿関係商品の移入高に基づく木綿業の地域的分業の表に基づき、摂津・河内・和泉では、国内で工程の地域的文化と社会分業が進展し、それにより木綿作が高度化していたと推測している。

18 世紀以降になると、山陰・瀬戸内海沿岸、そして東海・関東などの新興綿作地が発展し、畿内での綿業は頭打ち・衰退へ向かった。とくに大和の衰退が著しかったという（永原 2004、pp.328-329）。この表によれば、合計 118 万反のうちの 70 万反が播磨国から出荷されているとされ、大坂市場において大きな地位を占めていたことがわかる[1)]。

幕末、欧米諸国と修好通商条約が結ばれると、大量の木綿製品や半製品が輸入されるようになった。そして、1867 年以降、日本において機械紡績業が営まれるようになり、発展すると、日本在来の綿は機械紡績には合わず、それに向く中国の綿、後にはインドやアメリカの綿が輸入されるようになり、日本の在来綿の栽培は急速に衰退した。また、在来綿の手紡ぎによる木綿も、機械織木綿に圧倒され、生産されなくなっていった（武部 1989、pp.201-205）。

一方、1881（明治 14）年からの松方財政（緊縮・デフレ政策）により、米価が下落するとともに、地租改正（1873～81 年）による増税で、農民の負担が増大していた。これにより、小作農が増加し、大地主が形成され寄生地主化した。日本全体の小作地率は、推計で 1873 年が 27％だったのが、1883 年には 36％、1892 年には 40％、1907 年には 45％に達した。日本各地において農村を離れる者が増大し、都市へ流出した（木村 2010、p.266）

1879 年に約 2,100 万貫あった日本の実綿収量は、1907 年には 142 万貫にまで減じた。1885 年は綿作が凶作となり、それをきっかけとして、中国から安価な原綿の輸入が増加した。一方、機械織に適するアメリカの綿が導入され、各地で栽培が試みられたが失敗した（武部 1989、pp.206-210）。

また、1893 年には綿花の輸入関税廃止が国会で議決され、1896 年に法として公布されると、輸入綿の優位性は確実なものとなった。輸入綿による綿紡績業が発展する一方で、その後数年の内に、日本における綿栽培は、ほぼ姿を消した（武部 1989、pp.261-265）。

ここで、上記の歴史的事項について、中等教育前期、中学校の社会科歴史的分野の教科書における記載内容を確認しておく。2015 年検定の東京書籍『新編 新しい社会 歴史』では、「第 4 章 近世の日本」の「3 節 産業の発達と幕府政治の動き」「1 農業や諸産業の発達」における「農業の進歩」のなかで、都市における織物などの手工業の発達により、農村で現金収入を得るために、商品作物の栽培が広がったとされ、綿が例示されている。阿波における染料としての藍の特産についても記載があるほか、水産業において網を使用した漁が広がり、九十九里浜における大規模ないわし漁と、いわしの肥料（干鰯）への加工、それらの近畿地方などの綿産地への販売について言及されている。「2 交通路の整備と都市の繁栄」の「交通路の整備」では、近畿地方の物資を大都市江戸に運ぶ海路が輸送の中心となり、17 世紀中頃から木綿などを運ぶ菱垣廻船が往復したことが記されている。このように、中等教育前期の教科書において、近世の綿栽培とそれに関わる事項が記載されている[2)]。

近代以降の綿栽培の縮小に関しては、「第 5 章 開国と近代日本の歩み」の「1 節 欧米の進出と日本の開国」「6 尊皇攘夷運動と開国の影響」における「開国の経済的影響」の

なかで、イギリス産の安価で良質な綿織物、綿糸の輸入が、国内生産地や綿織物経営に大きな打撃を与えたこと、輸入綿糸による輸入綿織物に対抗した業者が現われたことが示されている。このように、近代における綿栽培や、在来の織物産業の縮小について記載がある。

Ⅲ　綿栽培の特徴

かつての日本において、綿はいかにして栽培されていたのだろうか。現代においては、織物業者や染織家などが、自ら栽培した綿から綿糸や綿織物を作る例も少なくない。また、観賞用に栽培することも多いようで、インターネットで検索をすると、綿の作り方を紹介している個人や法人により栽培記録が記事として発信されていたり、園芸ホームページサイトで栽培法が紹介されている例を数多く目にすることができる。

摂津・河内・和泉で綿作が最盛期を迎えた江戸時代の中頃に、西日本各地における綿栽培を学び、『農用具便利論』の著者としても知られる大蔵永常により著わされた『綿圃(めんぽ)要務』（1697 年）には、綿の作り方についてまとまった記載があるが、成長日数に応じて記されており、作業が行なわれる時期自体の記載はない。

行政が綿栽培の流れについて記録として残した、香川県農林部農業改良課編（1984）『さぬき手仕事の風土記』という書籍がある。同書は、農家の作物栽培や糧としてきた手仕事について、多数の写真資料とともに記録していて、瀬戸内地域における伝統的な農業の記録として資料的価値は高いと考える。同書によれば、香川県では 1962 年まで綿の営利栽培が行なわれていた。栽培適地は、排水良好な砂土、砂壌土で、乾燥した日当たりの良いところを選び、湿害に弱い。3 月下旬～5 月上旬までに、普通は麦の間に播種する。元肥は堆肥が中心で、生育に応じて 7 月下旬までに、追肥として薄くした下肥を灌水する。植え付け後、30～40 日ほどして中耕と間引きを行ない、7 月中旬～8 月中旬頃にかけて 2、3 回行なう。8 月下旬頃から開花が始まり、花が咲いて 50～60 日して晴天が 2、3 日続いた後に実がはじけると綿毛を吹き出す（写真 1）。10～12 月まで、はじけた順に収穫して、7～10 日ほど干すとのことである。

写真 1　綿の花（中央上）とはじけた綿毛（中央）
2004 年 10 月 31 日に国指定重要文化財鴻池新田会所（東大阪市）において矢嶋撮影

一方、『日本農業全書 15』掲載の『綿圃要務』における岡光夫による注記に基づくと、種まきの時期は八十八夜前後で、陽暦の 5 月 2 日頃となる。関西で

はこの頃に遅霜がおさまるため、霜に弱い作物の移植・播種時季の目処になるという。なお、この栽培方法がどの地域のものかは明記されていないが、一通りの記載の直後に記されている「播州姫路辺作り方の事」に、「手入・肥しは摂州にかハる事なけれバ略す」とあることから、摂津国における栽培法と推測される。なお、この「播州姫路辺作り方の事」によれば、播州姫路付近では、八十八夜から4、5日後が蒔き時とされる（岡 1977、p.354、p.378）。図3として、「播州姫路辺作り方の事」に掲載される図を示す。

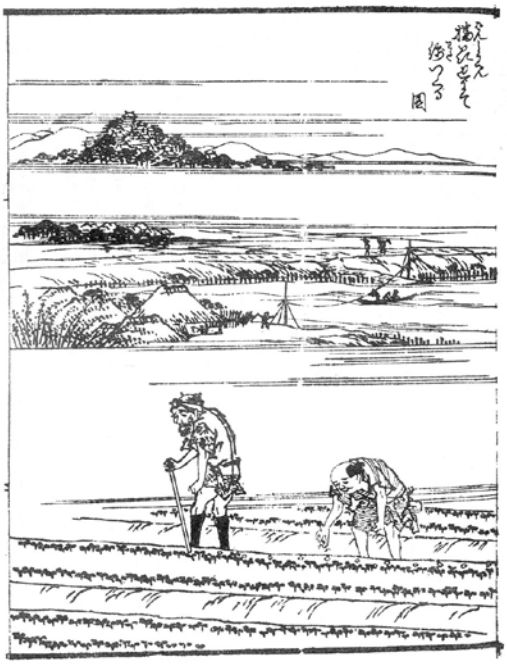

図３　『綿圃要務』にみる「播州辺にて綿つくる図」
資料　大蔵（1977）

江戸時代における綿の栽培は農家に大きな収入をもたらしたものの、以上に示された農作業からも分かるように、栽培には多くの経費が必要とされた。まず、綿栽培には大量の肥料が必要とされた。武部によれば、江戸時代中期から後期における河内国における綿作では、稲の2、3倍程度の肥料を投入していた。肥料には、高価な有機質肥料が使用され、干鰯、あぶらとり鰯、油粕（菜種粕）、胡麻粕、綿実粕、焼酎粕などが盛んに売買された（武部 1989、pp.130-133）。また、綿栽培には大量の労働力も必要とされた。とくに綿摘みでは多くの労働力が使用され、江戸時代の和泉では、紀州や淡路から多くの季節労働者が雇われたとされる（武部 1989、pp.135-136）。

『綿圃要務』によれば、3年綿をつくると地変えをするべきという農民がいる一方で、手入れや施肥次第で何年も同じ土地でつくるところもあるとしており、江戸時代、綿は連作されていたと考えられる（岡 1977、p.346）。

一方、綿作は豊凶の差が大きく、多大な経費が発生することもあって、江戸時代の綿作地帯に不安定性をもたらしていたことも指摘されている（武部 1989、p.137）。

Ⅳ　近世の加古川における綿栽培

農学者宮崎安貞（1697）の『農業全書』において挙げられるほど、江戸時代中期の播磨地方では綿作が盛んであった（加古川市史専門編さん委員編 1994、pp.436-439）。ただし、大

坂の医師寺島良安による『漢三才図会』（1713）によると、木綿の品質は、伊勢松阪を上、河内・摂津がそれに次ぎ、三河・尾張・紀伊・和泉が中、播磨・淡路は下に位置づけられていた（永原 2004、pp.282-283）。

『綿圃要務』に、「播州姫路辺作り方の事」という章が設けられている。『綿圃要務』によると、播磨の気温が大坂付近と違いがないこと、土質が重粘であるため、田の土は春に耕し日にさらして乾し、細かく砕く必要があるとしている。岡による注記によれば、播州の主産地には畑綿作がかなりあり、麦や蚕豆[3)]の後に栽培したとされ、畑で二毛作が行なわれていたことになる。図 4 にあるように、麦の刈り取り以前に麦の両脇に植えたものと思われる（岡 1979、pp.378-388）。

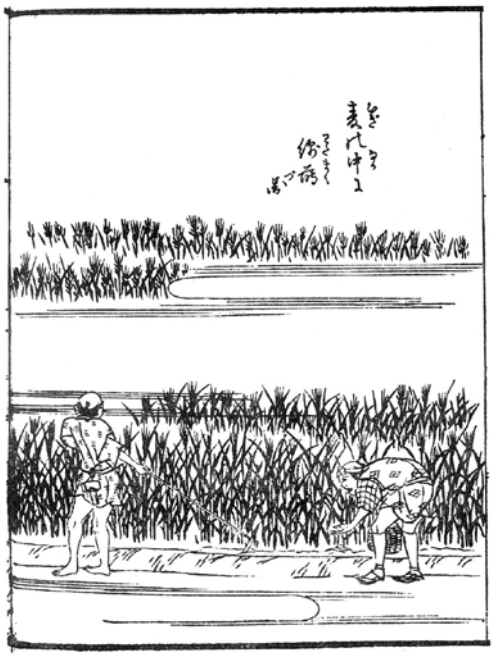

図 4　『綿圃要務』にみる「麦の中に綿蒔図」

『兵庫県史第 4 巻』によれば、兵庫県における木綿栽培の初出は、17 世紀初頭、摂東郡上堂本、広山（現たつの市龍野）における 1601（慶長 6）年 9 月の検地帳に「木わた」が栽培されていた記載であるとされる。しかし、17 世紀前半の兵庫県域における綿作の展開の状況はほとんどわからない（兵庫県史編集専門委員会編 1979、p.157）。

播磨国における綿栽培について、『加古川市史第 2 巻』によれば、1762（宝暦 12）年刊行の『播磨鏡』によれば、印南郡および加古郡は、播磨国における木綿の名産地、特産地とされ、かつて綿作の中心地であったと推察されている。しかし、この頃までの綿栽培の大きさをうかがい知ることができる史料はほとんど見いだされていないとされる。その理由として、播磨地方では、畑で綿作が行なわれ、水田では稲作が営まれていたことが関係している。畑は年貢の非対象であり、領主には報告不要であったためとされる（加古川市史専門編さん委員編 1994、pp.436-437、姫路市市史編集専門委員会編 2009、p.255）。なお、18 世紀初頭の河内などでは、半田といって、水田で綿作が行なわれていたが、それは農民の統制が取れていなかったためとされる。水田綿作であれば米作収量に影響し、年貢取り立てに差し支えが出かねないが、姫路藩が規制していたものと推測されている（加古川市史専門編さん委員編 1994、pp.436-439）。加古郡の内陸部である現在の稲美町付近では、幕末、畑地の約 7 割～9 割、全田畑面積の約 2～4 割で綿作が営まれていた。沿岸部ではとくに綿栽培が盛んで、全田畑面積の 5 割以上で綿が栽培されている村が多かったとされる（加古川市史専門編さん委員編 1994、pp.576-578）

姫路藩は、近世中期には木綿を重要な収入源として位置づけるようになり、1712（正徳 2）

年に木綿仲買の鑑札発行を開始した。1808（文化 5）年以降、姫路藩による木綿専売制が実施され、1810 年からは畑での綿作が奨励された（加古川市史専門編さん委員編 1994、p.439）。

18 世紀半ばにおける加古川市域の村々の村明細帳には、村々の収入源として木綿稼ぎが記され、女性の仕事として位置づけられている。自家で糸を紡ぎ、あるいは他所から綿を購入し、機織りが営まれていた。そして、流通の拠点となっていた加古川宿には、木綿商人や綿繰り屋が発達していた（加古川市史専門編さん委員編 1994、pp.502-503）。

Ⅴ　近代の加古川農村における綿栽培の衰退

１．明治初期における綿栽培

姫路木綿は、明治 10 年代まで生産を維持した。『加古川市史第 3 巻』によれば、1877（明治 10）年における加古郡、印南郡の農業生産額に実綿の生産額が占める割合は、それぞれ、15.4%、7.5%で、播磨国の 5.6%、全国の 3.4%を大きく上回っていたことから、加古郡、印南郡は綿栽培の中心地であったと考えられている。ただし、印南郡は綿作から米麦作へと移行が始まっているとも指摘している（加古川市史専門編さん委員編 2000、pp.37-39）。

加古川東部地域の農村である神野町石守地区の有限責任石守信用購買利用販売組合の『組合創立三十周年記念誌』（1933 年）によれば、明治初年には水田で米麦が、畑地では綿花栽培盛んであったとされ、副業として糸紡ぎや織布が営まれ、地区住民の経済は豊かであったとされる（加古川市史専門編さん委員編 2000、pp.18-20）。

加古川西部地域の農村である志方町東飯坂村（図 2 参照）の 1878（明治 11）年の物産取調結果によれば、水田二毛作で、夏作に米や綿、冬作に裸麦や菜種が栽培されていた。また、畑では夏作に綿を含むさまざまな作物を、冬作に小麦を栽培する二毛作が営まれていた。このように、耕地をフル回転して農業が行なわれていた一方で、多様な副業も営まれていた。木綿稼ぎといわれる綿に関する仕事は重要であった。とくに、木綿織りは、45 戸中、富裕層を除く中小零細農家 37 戸の女性によって行なわれ、木綿稼ぎの果たしていた役割の大きさが想像できる（加古川市史専門編さん委員編 2000、pp.39-41、p.43）。

２．綿栽培の衰退と綿作に縁を持つ産業の勃興

1882～84 年にかけて、凶作と松方デフレによる影響で、兵庫県においては綿作高が激減した。加古川において生産が続いた姫路木綿は、原綿生産から製織まで一貫生産を行なっており、綿糸輸入による木綿生産増加は困難であった。白木綿を生産してきた姫路木綿の産地は衰退に至った。綿作も成り立たなくなり、明治末期から大正期にかけて、印南・加古郡では綿作はほとんどみられない状況となった（加古川市史専門編さん委員編 2000、pp.49-50）。

加古川地域においても、この時期、多くの農民が急激に没落し、家族ごと阪神地方へ移住する者も少なくなかった。農家の収入は減少し、他町村の所有となった耕地も少なくなかった。その一方で、大地主が形成されていった。（加古川市史専門編さん委員編 2000、pp.18-

20）。

こうした状況下で、現在の加古川市において、綿作に関連した新たな産業が大地主の手によって勃興した。明治 10 年代、米価に比べて肥料の価格が騰貴していた。加古川では大洪水や旱魃も相次ぎ、農村は窮乏していた。別府地区では、江戸時代の干鰯商から続く肥料商を継いだ多木久米次郎が、安価な獣骨を使用した人造肥料生産に乗りだして 1885（明治 18）年に成功し、1918 年の多木製肥所（現多木化学(株)）の設立につながった。この時期には、松方デフレの影響を受けて、農家の肥料購買力が減退し、堆肥、人糞、厩肥といった自給肥料が農家にとって中心的な肥料となっていた。『加古川市史第 3 巻』に掲載されている「表 4　加古郡村々で消費された肥料」に、多木久米二郎が調査したと考えられる 1884・1885 年の肥料種類が掲載されている。これによれば、1885 年では、胴鯡 52,000 貫、鰯 2,123 貫、酒粕 782 貫に対して、堆肥 5,123,562 貫、人糞 421,000 貫、尿 320,000 貫、厩肥 256,732 とあり、堆肥の比重が極めて大きいことがわかる（加古川市史編さん専門委員会編 2000、pp.163-164）。

1891 年には、志方町横大路の大規模木綿商稲岡家がタオル製造に乗りだし、稲岡商店を設立した[3]。当初手織だったが、機械化を進めた。海外輸出を積極的に手がけ、明治～大正期には、全国輸出量の 15%程を占めた（加古川市史専門編さん委員編 2000、p.132）。また、明治時代に靴下編立機がもたらされたことがきっかけとなって、志方地区で靴下の製造が開始され、大正時代以降、技術革新により急速に発展した。1954 年の時点で、志方町のメリヤス県生産額シェアは約 7 割となっていた。現在も地場産業として生産が続いている（加古川市史専門編さん委員編 2000、p.905；兵庫県靴下工業組合ホームページ「KAKOGAWA SoCKS」による）。加古川において、綿づくりの脈絡を有する産業が、現代にまで続いていくのである。

Ⅵ　おわりに

本稿は、日本における綿栽培の広がりと、加古川市域におけるかつての綿栽培について明らかにし、加古川における綿栽培の歴史を日本全体の中に位置づけるべく、綿栽培に関する諸研究や加古川市史などを整理した。

綿栽培は多くの労働力と肥料を要するが、その収益性の高さから、15 世紀末から 16 世紀初頭にかけて、東北地方を除く日本各地に栽培が広がった。播磨国は江戸時代において日本有数の生産地で、現在の加古川市域が位置する印南郡・加古郡は、畑で麦との二毛作によって綿が栽培されていたと考えられる。

明治 10 年代以降の加古川市域では、日本の趨勢と同様に、綿栽培が急速に衰退した。しかし、加古川市域において、綿栽培の歴史とつながりを持つタオル製造、靴下製造、そして人造肥料の製造へとつながった。

以上を念頭に、実際の加古川市西神吉町、東神吉町の風景を思い起こすと、いくつかの疑

問が生じる。まず、現在販売目的で作付けされる耕地の 9 割以上を稲の面積が占めている現状において、かつてどこで綿が栽培されていたのかという点である。加古川市西部地域の溜池には、近世に築造されたと思われるものの、正確な築造時期が不明なものが少なくない。稲作、溜池、綿栽培の拡大時期とともに、検討していく必要がある。

1884～85 年頃に、加古川の村々において、堆肥が肥料の中心となっていたことに関しては、『加古川市史第 3 巻』に掲載されている「表 4　加古郡村々で消費された肥料」の典拠となっている『多木久米次郎草稿』「肥料累年消費高」について、これは加古郡のどこを対象として、どのように行なわれた調査なのだろうか。原資料は加古川市史史料編に掲載されておらず、現時点では詳細は不明である。

このことに関連して、大量の堆肥を得ることにより、林野の荒廃が想定される。この地域における明治初期の里山の変容についても検討が必要である。

現在の播磨地域において、販売目的での本格的な綿栽培は見られない。しかし、序論にも示したとおり、加古川の綿栽培の歴史に縁を有する産業において、綿栽培の歴史を掘り起こす動きが生じている。営農組合への綿栽培への委託や地元小学校との連携も行なわれており、今後の活動の継続について注視する必要がある。

学校教育との関連でいえば、本研究で示された近世における加古川地域の綿栽培の状況は、中等教育前期社会科歴史的分野の教科書における日本の綿栽培に関する記載内容に対応するものであった。教科書の記載内容と、居住地域の歴史がつながることが意識されるようになると、生徒にとって、地域を見る目が変わってくることだろう。

また、地域の綿栽培の歴史を踏まえたプロジェクトに関しては、それらの価値を高める何らかのストーリーが加わることで、プロジェクトの推進力はさらに高まるものと思われる。その際、日本史との結びつきは意味があると考える。今後、綿栽培の歴史についての研究が進むことで、新たな史実が見いだされることを期待したい。その際、綿を含め、途絶えてしまった作物栽培の歴史などを活かした他地域における取り組みなど、類する他の事例との比較研究が肝要である。

今回の研究では、兵庫県における綿栽培の開始時期について俯瞰した研究は、管見の限り、1979 年刊行の『兵庫県史第 4 巻』における記載以降では見いだせなかった。いずれにせよ、綿栽培に関する最新情報による整理が肝要であろう。

注

1）　ただし、永原はこの表の分析で、木綿（実綿）を出荷せず白木綿だけを出荷する国々では木綿作が行なわれず、繰綿か綛糸を大坂から購入して木綿織物生産だけを行なっているとしているが、後述のように播磨地方では綿栽培も盛んであり、これにはあたらない（永原 pp.328-329）。

2）ただし、近世の記載は事実羅列的で、要素の関連性についての言及は乏しく、い点を指摘しておく。

3)　空豆のことである。

4)　1987 年に稲岡工業と社名変更し、2012 年まで操業した（神戸新聞東播版 2012 年 8 月 30 日記事・9 月 2 日記事）。

＜参考文献・ホームページ・テレビ放送＞

秋山高志・北見俊夫・前村松夫・若尾俊平編（1991）『図録・農民生活史事典』柏書房

岡 光夫（1977）「綿圃要務・解題」大蔵永常『日本農書全集 15 除蝗録全後編・農具便利論　上中下・綿圃要務　大蔵永常』農山漁村文化協会、pp.317-431.

香川県農林部農業改良課編集発行（1984）『さぬき手仕事の風土記』

加古川市史専門編さん委員編（1989）『加古川市史第 1 巻本編Ⅰ』兵庫県加古川市

加古川市史専門編さん委員編（1994）『加古川市史第 2 巻本編Ⅱ』兵庫県加古川市

加古川市史専門編さん委員編（2000）『加古川市史第 3 巻本編Ⅲ』兵庫県加古川市

かこ・スタイル編集委員会編（2015）『かこ・スタイル 2』シミンズシーズ

菊地俊夫（1984）『日本歴史地理概説』古今書院

木村茂光（2010）『日本農業史』吉川弘文館

武部善人（1989）『綿と木綿の歴史』御茶の水書房

永原慶二（2004）『苧麻・絹・木綿の社会史』吉川弘文館

姫路市市史編集専門委員会編（2009）『姫路市史第四巻本編近世 2』姫路市

日本綿業振興会監修、大野秦雄・広田益久編（1986）『はじめての綿づくり』木魂社

兵庫県史編集委員会編（1967）『兵庫県百年史』兵庫県

兵庫県史編集専門委員会編（1979）『兵庫県史第 4 巻』兵庫県

矢嶋　巌・神戸学院大学人文学部人文学科人間と社会コース現代社会領域 2015 年度矢嶋ゼミ 3 回生（2016）「都市近郊農村のより良い生活環境を目指して―加古川西部地域における宝物の発見―」神戸学院大学地域研究センター編集発行『都市郊外地域における大学と地域との協働に関する研究 研究成果報告書＜地域研究センター都市郊外班＞』pp.1-56.

山脇悌二郎（2002）『事典 絹と木綿の江戸時代』吉川弘文館

朝日新聞朝刊播磨版 2011 年 7 月 27 日記事「江戸時代に広まった「高砂ブランド」松右衛門帆、バッグに」

朝日新聞朝刊播磨版 2013 年 4 月 6 日記事「播磨の綿花 めざせ再興」

神戸新聞朝刊東播版 2012 年 8 月 30 日記事「＜イカリの軌跡 播州タオル 120 年＞(4) 新種の社風　製織、漂泊で新機軸次々」

神戸新聞朝刊東播版 2012 年 9 月 2 日記事「＜イカリの軌跡 播州タオル 120 年＞(7) 2 度の破綻　優位性を保てず力尽く」

サンテレビ 2016 年 12 月 17 日放送、姫路のひろば「姫路木綿、復活プロジェクト」https://www.city.himeji.lg.jp/kouhou/kouhoushi/backnumber/201612/media01.html（2017 年 3 月閲覧）

兵庫県靴下工業組合ホームページ「KAKOGAWA SoCKS」、http://hyogosocks.or.jp/menu_03.php（2017 年 3 月閲覧）

都市郊外地域における大学と地域との協働に関する研究
研究成果報告書

発行日：　2017 年 3 月 20 日
編集者：　神戸学院大学地域研究センター
発　行：　神戸学院大学地域研究センター
〒651-2180　神戸市西区伊川谷町有瀬 518
TEL（078）974-1551（代）
印　刷：　神戸学院大学 ポートアイランドキャンパス印刷室
富士ゼロックス兵庫株式会社